



臆することなく果敢に
挑みホームランを



パシフィックコンサルタンツ株式会社
代表取締役 社長

しげなが ともゆき
重永 智之

スポットライトは、“いま、会いたい” 土木業界で活躍している話題の人を訪ねる企画です。今回は、パシフィックコンサルタンツ株式会社の重永智之様にお話を伺いました

(聞き手：笹岡編集委員)。

インタビュー取材日時：2020年7月

山口県での青春時代

笹岡：今回が編集委員として初めてのインタビュー取材で少し緊張しておりますが、どうぞ宜しくお願い致します。まずは幼少期のお話をお聞かせ頂けますでしょうか？

重永：私、生まれは三重県四日市市です。ちょうど1歳の時に、伊勢湾台風が直撃し、当時2階に住んでいたそうですが、風で壁が飛ばされてえらい目にあったそうです。その後、親の仕事の関係で大阪に行き、小学校4年生ぐらいから山口県の周南市（当時は徳山市）で高校時代まで過ごしました。

笹岡：どのようなお子さんでしたか？



幼少の頃

重永：やんちゃでしたね。石を投げて誰かに当たって、怒鳴り込まれたり、色々とお迷惑をかけたみたいです（笑）。

笹岡：中学や高校時代に打ち込んでいたことはありますか？

重永：高校時代に柔道をやっていました。よ

く小さい人は技で人を倒すと言いますが、あれは嘘で、やっぱり大きい人が強いに決まっている。それでも結構熱心に柔道部で活動していて、全然勉強はしていませんでした。高校3年生の春に部活が終わって、そこから秋に運動会や文化祭があって、11月ぐらいから1日15時間ぐらい猛勉強して大阪大学に進学しました。

『めぞん一刻』的な大学生生活

笹岡：造船学科に進まれたと拝見したのですが、それは何か理由が？

重永：受験期間によく、ネスカフェのCMに「違いのわかる男」といったキャッチフレーズで建築家の清家清せいけきよしが出演していたんですね。それがとてもかっこよくて、本当は建築学科に行きたかったんです。当時の阪大というのは、入学時に希望科を5種類まで選べたので、1番目を建築学科にして、2番目を土木学科、3番目を環境学科、4番目が造船学科だったんです。それで成績順に振り分けられるということで、造船学科になったということなんです。



大学生の頃

笹岡：造船学科というのは、土木と関わってくる科目もあるのでしょうか？ 例えば構造力学でしたり……。

重永：ええ。阪大では建設系という括りの中

に建築学科・土木学科・造船学科が分類されていて、構造力学もやりますし、流体力学も勉強します。船は常に変動する波の力を受けながら動くので、どちらの知識も必要です。私はどちらかという波のエネルギーを使って発電ができないかという流体を主に勉強していました。

笹岡：学生時代の記憶に残るエピソードはありますか？

重永：下宿先の大家のおばちゃんが梅田や難波に土地をもっていたようで、結構裕福だったのか、住んでいる私たちを誘ってよく飲み連れて行ってくれたんですね。それで最後は大家さんがぐでぐでんに酔っ払って私達が担いで帰るんですが、たまにそのまま田んぼに落ちてしまったりしました（笑）。そこは色々な大学の学生が住んでいて個性的なメンツが多くて、『めぞん一刻』みたいな感じでしたよ。今でも年1回会って飲みに行く仲間です。

笹岡：まかない付きのようなイメージでしょうか？

重永：いえ、まかないはついてないんです。あくまでも大家さんが飲み連れて行ってくれるだけ。たぶん私達の家賃は飲み代になっていたんでしょうね（笑）。

日立造船から

パシフィックコンサルタンツへ

笹岡：大学を卒業されてから、日立造船に就職されるわけですが、この経緯は？

重永：当時、造船業界は不況でしたが、暗黙の了解で、学部卒1名、院卒1名は造船会社に入れるということになっていました。それで、私は手を挙げたわけですが、もう1人、

希望していた先輩がいたんです。成績的には、私はギリギリで卒業というような感じだったので「まずいな……」と思っていたんですが、私が手を挙げた日立造船は九州の有明やいろいろなところに工場があって転勤がある。そのため希望していたもう1人が辞退したんです。それで日立造船に面接に行けることになりました。面接で「君は、現場向きだな」ということで今はもう船を造っていないんですが、堺工場に赴任することになりました。

笹岡：そこではどのようなお仕事を？

重永：最初は海洋構造物（ジャッキアップリグ）居住区の設計を任されました。大卒で入ってくるのは珍しかったらしく、しかも私は色黒だったので、他の新入社員には庶務のお姉さんが弁当を食べるためのお箸をくれるのに、私にはくれない（笑）。どうもずっと現場にいる人だと思われていたみたいで「ごめんやで～」と言われましたね。



日立造船時代の重永社長

笹岡：堺工場にずっといらしたのですか？

重永：居住区設計の仕事が終わった後は、ちょうどCADを使い始めた時期だったので、それを使って配管のプラント設計をやっています。

した。そうこうするうちに、「ちょっと東京に行ってこい」という命令が下り、出向で行くことになりました。

実は、私、東京が苦手だったんですね。どうも東京弁というか標準語を話すのに抵抗があるというか（笑）。でも、いざ東京に行ってみたら、すっげー面白い！ なんだここ！？ 梅田や難波みたいな街がごろごろあるぞ、みたいな感じで魅了されました。それで東京や大阪を行ったり来たりしつつ、ODAの仕事で短期間ですがフィリピンやインドネシアにも行ったりしながらの生活を送っているうちに造船不況が襲ってきて、紆余曲折を経て日立造船を辞めることにしたんです。

笹岡：パシフィックコンサルタンツは、東京にいらした時に知ったのでしょうか？

重永：そうですね。日立造船時代に一度、パシフィックコンサルタンツが沈埋トンネルをつくるための情報をいろいろ持っているということで、上司と一緒に菓子折りをもって構造部に挨拶にいきました。その際に上司から、“パシコンは日本工営と並ぶ建設コンサルタント業界では屈指の会社だ”ということを教わったのですが、私は「はあ？ パシコンってなんやねん？」みたいな感じでした（笑）。それで日立造船を辞めて、職探しをしているときに、目についたのがパシコンで、給料もよかったし、応募しました。当時色々な会社に応募はしていましたが、いつも最終面接で、私が偉そうなことを喋るものだから5社ぐらい落とされました。パシコンの最終面接でも、偉そうなことを言ってしまった。そうしたら、私を妙にフォローしてくれる人がいて、後にわかったのですが、その方は私が配属予定の部門の元部長さんでした。昭和62年、28歳にしてようやくパシフィックコンサルタンツに中途社員として入れたというわけです。

竜飛岬での思い出

笹岡：パシフィックコンサルタンツに入社されてから一番記憶に残っているのはどういったお仕事ですか？

重永：5月に入社しましたが、入ってすぐに開業前の青函トンネルがある竜飛岬に行かされたことですね。そこで何をしたかと言うと、列車で火災事故が発生した場合にきちんと避難ができるかどうかを確認する実験をやりました。実際に火皿にアルコールを入れ、燃焼させて放っておくと熱気流なので黒い煙がすーっと見事に上がって行って、層状に流れていくんですね。その後、煙を排出するために、排煙機を回すと煙が攪乱されてぐちゃぐちゃになるんです。その真っ黒なトンネルの中を消防署の人が「お前、あそこに行って確認してこい」と言うわけです。「殺す気か!？」と思いつつながら、タオルで鼻と口を押さえながら確認しに行ったのは一番の思い出ですね。

さっき申し上げたように、私の入社が5月で1か月も経たないうちに、いきなり竜飛岬に行ったものですから、他の人間は、私がとっくに退社していたかと思ってしまうらしいです。東京に戻ってきた時には「あれ？」という感じで迎え入れられて（笑）。



竜飛岬の現場にて

建設コンサルからインフラ全般の事業展開

笹岡：最近、力を入れられている仕事はありますか？

重永：当社は建設コンサルティングがメインですが、後ほど詳細は述べるように、今は、建設コンサルだけでは生き残っていけない時代になりつつあります。そこで「事業」にも手を伸ばそうということで始めたのですが、それも印象に残っている仕事ですね。

具体的には、千葉県の上野村で、「CHIBAむつぎわエナジー」という会社を、町と当社の子会社が設立し、電力供給を行えるような事業展開を行っていくことにしました。そこで得られた利益を地元還元しようという事業です。

他にも道の駅の運営や、今はコロナで大変なことになっていますが、コンセッションで高松空港の運営にも携わっています。

笹岡：最近では海外にも果敢に出ていかれていますね。

重永：今はコロナの影響でほぼ全社員戻ってきていますが、海外でのコンサルや事業展開は、需要が絶対にあるので、止めるつもりはありません。

少し建設コンサルタント全般の話をしたと思うのですが、やはり多くの人にとって、建コンって何やってるの？ というイメージがあります。そこが人材確保などの点からしてもゼネコンとは全然違います。でも業務内容を知ってもらえれば、面白がってくれる。それじゃあ、建コンの仕事内容をPRして従来通りやっていけばいいのかと言うと、話はそう単純ではないわけです。当社は来年で70周年を迎えるのですが、昔から当社の技術者らは自分たちの持っている技術力やノウハウを金額を下げ提供してしまいがちで

す。それは仕方のない部分もありますが、それでは今後生き残れない。技術者単価は建設コンサルタンツ協会のおかげで元に戻りつつありますが、これから先、同じ要望を出していくのはどうなのかと私は思っています。

笹岡：そういう意味でも、先ほどの事業ではないですが……。

重永：「建設」という冠を取り払うわけではないですが、もっと広くインフラ全般にコミットできるような会社になっていかないといけないと思っています。技術屋さんって、良い意味でも悪い意味でも「マジメ」です。自分の領域がこれだと定まったら、なかなかそこを動かこうとしない。私としては、様々な分野とコラボレーションしていくことが大事だと思っています。そういう意味で、今、当社に情報システム部という部署がありますが、そこを「攻め」の部隊にしたいと思っています。

笹岡：コンサルだけではない仕事をということですね。

重永：そうですね。我々、経営者側も少し反省をしなければならぬ点もあるんですね。経営側としては内部統制や社員管理が大切な時代になってきてそれを重視するようになった。でも、それがあまりにも厳しいと、かつてあったような余裕しろの部分が無くなってしまい、社員に「息抜き」の余裕が無くなってしまふ。それではクリエイティブな発想は生まれてこない。そこが経営と現場との狭間で難しさを感じているところです。

男性育休 100%取得目標と コロナで変わる会社

笹岡：パシフィックコンサルタンツさんは現在、男性の育見休業 100%を目指しておられ



インタビューを受ける重永社長

ますよね。これは業界的にはかなりチャレンジングだと思うのですが、打ち出したキッカケは何かあったのでしょうか？

重永：私自身がそうだったのですが、自分が若い頃に全然育児に参加してこなかったという反省があります。それから出産後の女性の産後鬱になる可能性が一番高くなるのが出産後2週間だそうです。その間だけでも旦那さんが休みを取ることができれば随分と奥さんも精神的に楽になるし、2人目や3人目に繋がっていくということも視野に入れてこの目標を掲げました。

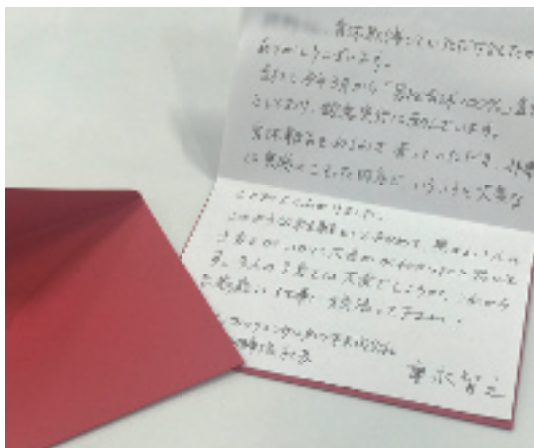
笹岡：現状の取得率はどのくらいですか？

重永：80%ぐらいにまで増えてきましたね。

笹岡：育児休業から戻られた社員さんに向けて直筆のお手紙を差し上げているとも聞きました。

重永：前社長の頃からやっていましたが、最近は取得率が多くなってきたので、文面は印刷して直筆のサインぐらいにしようかなと（笑）。

笹岡：男性の育休取得率の増加で働き方が変化してくると思うのですが、今年は何といっ



育児休暇から戻られた社員に向けてのメッセージ

でもコロナの影響があり、会社自体もその対応に迫られたと思います。御社ではどのような対応を取られましたか？

重永:やはりまずはテレワークの導入でした。今、社員に向けて新しいワークスタイルを考えるように言っているんですけども、在宅勤務やサテライトオフィスなど、オフィスの在り方を抜本的に考え直す機会になりました。全社員が、オフィスに来て、仕事をする意味があるの？ っていうね。例えば、設計図面などを扱っているとどうしても画面上ではチェックできなかつたり、プリントアウトが必要なところも出てくる。そういったときにサテライトオフィスみたいなどころがあるといいわけですね。それから負の面も見えてきています。テレワークにすると仕事をしている人間とそうじゃない人間が明確に分かってくる(笑)。テレワークにするとアウトプット勝負になってくるので、途中段階での努力や評価が難しくなってきますよね。だから、テレワークに向いている／向いていない人をきちんと把握するように管理職レベルには伝えています。

あとは採用の問題。これが悩ましいですね。今年、当社は全部オンラインで採用面接を行いました。果たしてそれがどうなのか、まだ手探りの状態です。逆に笹岡さんの会社は

どうでしたか？

笹岡:私は研究所勤務で土質や地盤のセクションに在籍していますが、どうしても実験や現場対応があるので、テレワークはなかなか難しいです。4月、5月はさすがにテレワークでしたが、自宅で業務を行っているとき「雑談」が全然ないことに気づきました。あのちょっとした雑談が随分と仕事を進めていく上で活力になっていたことがわかりました。

重永:なるほどね。会社をどういう場所にしていくかということで、笹岡さんがおっしゃられるように「雑談」のような場として捉えるような会社も増えていると聞きました。だからやっぱり、従来型の通勤型スタイルとテレワークの折衷案というのが、落ち着きどころなのかな……。でもやっぱりテレワークは楽でしょ(笑)？

笹岡:通勤的な面ではやはり楽ですね(笑)。

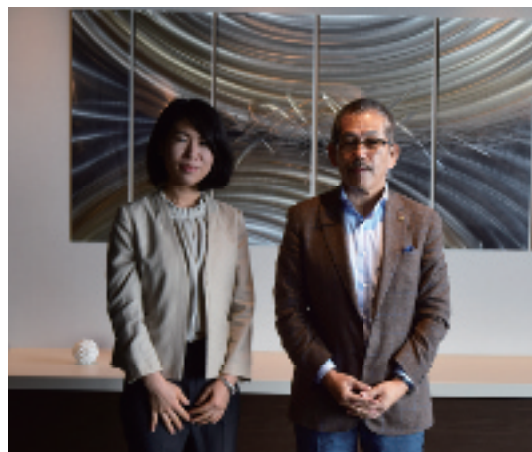
臆することなく外に出てホームランを

笹岡:最後になりますが、若手の技術者や学生に向けてのメッセージをお願いできますか。

重永:失敗をしてもいいのでどんどん臆することなく新しいことにチャレンジをしてもらいたいですね。1回や2回失敗したからと言って、「あんたダメね」という風土は当社にはありません。失敗を失敗と認めて、次のところでホームランを打ってあげれば良いと思っています。

それから今の若い人は、私たちの時代に比べて満遍なく優秀なんですね。私たちの世代は、仕事なり遊びの部分で「この分野では俺は絶対に負けない」という部分がありました。仕事でも遊びでもいいから、そういう面をもてるように若い人たちには期待したいで

すね。多様性の展開ということもあって、当社も自律型の社員になりなさいということを進めています。それは、やっぱり人から言われてやるんじゃなくて、自分たちで考える集団になって欲しい。みんながみんな同じベクトルでいると、世の中が別の方向に向いた瞬間に、その会社はアウトです。大きな筒のなかで、色々な価値観や多様性をもっていて、認め合う企業風土があるなかで、何となく方向性は一致しているという組織形態が理想的ですね。



パシフィックコンサルタンツでのインタビューにて

笹岡：本日はありがとうございました。

◇インタビューを終えて◇

今回のインタビューでは、「攻める」がキーワードの1つでした。これまでのご苦労や失敗談も、面白くお話し頂き、あっという間に時間が過ぎました。そして、重永社長のいつまでも「攻め」の姿が、建設コンサルの枠に留まらない事業展開、社会が大きく変化する中でそれをチャンスと捉えた会社経営などにつながっているのだと思いました。私自身も、いつまでも成長し続けるために、「攻め」の技術者でありたいと思います。

笹岡 里衣